

「沈黙」の話

豊島与志雄

青空文庫

寡黙の徳を讃えるのは、東洋道德の一つであり、西洋道德の一微分でもある。常にそうだと云えないが、或る場合に於ては、寡言を金とすれば、饒舌は銅か鉄くらいのものでろうし、沈黙は金剛石ほどになるかも知れない。だからこれを逆に、或る場合に於ては、沈黙は無智であり、寡言は小智であり、饒舌は大智であると、モダンな皮肉も云つてみたくなろうというものだ。

沈黙が金剛石であるとすれば、その結晶的純粹さと硬度とを以て自己を磨くことが、至極の修練となるわけであろう。面壁三年の例は云うまでもなく、沈黙的修業が如何に仏道に周く採用されてるかは、人の知るところである。また、トラピスト其他の修道院で如何にそれが採用されてるかも、人の知るところである。

*

さて、道德や宗教の方面のことを述べるには、叡智とか悟道とかいう困難な迷宮にふみこまなければならぬから、暫く措くとして、普通に、沈黙は、後で大に言わんがための、或は最後の一言を言わんがための、或は唯一の真理を言わんがための、その前提として役立つ。

関西方面の伝説に、「くだん」というものがある。百年に一度くらいしか生れないもので、その形は人頭牛身、ギリシャ神話のミノトールの丁度逆であつて、また、ミノトール（牛頭人身）やサントール（人頭馬身）が兇猛な怪物であるに反し、「くだん」は一種の神性を帯びている。生れて三年間、飲まず食わず、殊に一言も言葉を発せず、神秘的な生存を続けて、そしてその三年の終りに、世の変異を予言して死ぬ。形が人頭牛身であるところから、漢字に綴つては件くだんとなし、未来に対する予言が必定なところから、世俗もこれにならつて、証文などに「依如件」と書くのである。

「くだん」がもし始終饒舌つていたら、その予言の価値は認められずに終るだろう。が幸にも彼は、三年間の一生にただ一度口を利くのみである。それ故にこそ、予言は必定な真実となる。沈黙の効果も偉大なりと云わねばなるまい。

*

某君がひどく貧乏していた時のことであるが、貧乏は単なる外的現象として気にもかけず、美衣美食、派手な行動、なお方々に借金をこさえて、洒然泰然と納まり返つていたものである。そこへ、ぼつぼつ、借金支払の催促がくる。それを、某君は一々座敷へ通して引見する。

全くそれは一の引見である。債権者の方では、上座に控えてる彼に対して、初めは丁寧、それから縷々として、支払が余り延びてることや、自分の方の迷惑な事情や、または自分の立場の困ることなどを、真偽とりまぜて述べ立てる。或は懇願し、或は威嚇し、或は訓戒し、とにかく、話術の蘊奥をつくして説く。

その間、某君はただ黙然と坐っている。煙草を吹かすか窓外に眼をやるだけで、返事も碌にしない。そして最後に、相手が饒舌り疲れた頃になって、漸く口を開く。

「君の云うことはそれだけですか。」

相手は眼を白黒する。或は、これだけ云えば分るでしょうとか何とか、まあ答える。それへ疊みかける。

「只今、あいにく金がないんだ。この次にしてくれ給え。」

そこで、相手は言葉つきで、仕方なく引退つてゆくのである。

こので、某君は借金取り逐返しの名人となつた。一言も弁解の口を利かないというのが、その骨法なのである。沈黙を守っておればこそ、只今あいにく金がないという最後の一言が、^{くだん}件の予言と同じく、必定な真実となる。真実の前には、如何なる債権者も引退るの外はあるまい。

*

アルメニア地方に伝わってる民話には、沈黙のうちに一国の外交が処理されるものさえある。

むかし、或る国王のところへ、隣国から使者が来た。国王は大臣將軍等を左右に従え、玉座について、隣国の使者を迎えた。

ところで、この隣国では、饒舌を軽蔑するばかりでなく、嫌悪さえしていた。言葉巧みに滔々と述べ立てる者は、余り人から信用されず、僅かな言葉で多くのことを云い現わす者ほど、人から信頼されたのみならず、一言も云わずに自分の意志を人に通ずる者や、一言の問いもかけずに他人の意志を悟る者が、最も尊敬されるのであった。

そういう国から来た使者である。王の前に案内されると、一礼をしたまま、黙って進み出で、王の玉座のまわりに円を描いた。それからそこに坐りこんで、きつと唇を結び、王の顔を見ながら、返答を待つものようである。

王には、自分の玉座のまわりに描かれた円の意味が、どうしても分らない。眼付で、それから低い小声で、周囲の大臣や將軍たちに尋ねたが、誰にも分らないらしい。

王はひどく苛立ってきた。自分を初めとして、大臣將軍等のうちに、隣国の使者の意味

を判断する者が一人もないとは、一国の名誉に関することである。王は燃え上ってくる憤りを抑えつけ、相変らず沈黙を守つてる使者に向つて、隣室で評議した後に返答する旨を告げて、一先ずその急場を遁れた。それから大臣等に命じて、誰でもよろしいから隣国の使者に応対出来る者を探させ、もし見付からなかつた場合には、一同の首を刎ねると申渡した。

使いの者たちが八方に飛んだ。そのうちの或る者が、城下の陋屋に住んでる一人の賢者を見出した。みごと隣国の使者に應對してみようというのである。

そこで、王はまた玉座につき、左右には大臣將軍等が居並んだ。隣国の使者は、沈黙のうちには坐り続けている。

賢者は隣国の使者の方へ進み出で、子供の玩具をその前に置き、じつとその顔を見返した。

使者は少し驚き、当惑したようであつた。やがて、平静に返つて、一握りの粟を取出し、それを床ゆかの上にまき散した。

賢者は静に微笑んだ。鶏の雛を一羽取出して、そこに放つた。雛はたちまちに粟粒を食い初めた。

使者は一寸たじろいだ。それから礼をして、立止って、首垂れながら帰っていった。

この、沈黙の外交問答を、解釈しようならば――

隣国の使者は玉座のまわりに円を描くことによつて、こう尋ねたのである。「もし我国の軍勢が征め寄せて、貴国の王城を包囲したならば、如何なさる思召か。降服なさるか、それとも防戦なさるか。」

賢者は子供の玩具を差出して、答えた。「我国の軍隊に比ぶれば、貴国の軍隊などは子供同然である。」

使者は粟粒をまいて、云つた。「我国には無数の兵士がいる。」

賢者は鶏の雛をだして、答え返した。「我国の兵士は、一人で以て貴国の兵士の百千を屠るであろう。」

そこで使者は、かかる問答の出来る賢者がいるような国を征むるは、危し危しと考えて、その旨を復命しに帰っていったのである。

以上が、このアルメニアの民話の大意である。この調子でゆけば、国際間の問題は凡て、あらゆる繁雑な懸引や手続を脱して、驚異的な簡明さで片附くようになるだろう。

この民話は、吾国の蒟蒻問答という落語と、同工異曲……という以上に、同工同曲であ

つて、共に沈黙の雄弁さを示すものである。

*

民話や落語の類でなく、沈黙のうちに實際生活の用が弁せられた話が、いくらもある。而もそれが、寡言沈黙を高く評価する東洋もしくは東方諸国にばかりでなく、アフリカのセネガル地方にまでもある。

この地方の黒人は、塩を至つて大事なものとする。昼夜同じ長さの赤道直下の暑さだから、もし塩を攝取しなかつたら、血液が腐敗してしまふだろうと、一般に信じられている。それで水の容器に塩を溶して、毎日それを貪り飲み、その効果で、健康と体力を維持することになっている。

それ故、塩の製法を余り心得ぬこの地方では、塩が重要な商品となつて、高価に取引される。そして一地方で消費された残りは、他の地方に送られる。大きな塊りになされて、その二塊で駱駝一頭分の積荷となる。それが次の土地に運ばれると、一個が人間一人で持てるくらいの大きさに分割される。そして其処で消費された残りは、また次の土地に送られる。部落の強健な男子が集つて、塩の一塊を頭にのせ、隊を組んで出かける。長い熊手を杖にもつていて、疲れるとそれによりかかつて休息する。そしてこの塩商の一隊は、或

る大河の岸までやってゆく。

大河の岸で、彼等は頭から塩の塊りを下して、その草の上に一列に並べ、各自自分の塩塊にしるしをつけて、約半日行程ほど後退する。

大河の彼岸には、他の黒人が住んでいる。偉大な体躯で、眼が漆黒で大きく、その上唇は普通だが、下唇は厚く太く、顎のところまで垂れている。口の両角からは、牙のように長い歯が一本ずつ突出している。そしてその恐ろしい黒人も、体力を維持するために塩を必要とし、殊にその大きな下唇は、暫く塩を攝取しないと、暑気のために腐爛する恐れがある。

さて、こちらの塩の隊商等が、半日行程ほど退いて休んでいると、彼方の黒人等は、舟を操って河を渡ってくる。そして塩をよく調べ、その各塊の上に、至当だと思われる黄金の量をのせて、直に舟をこぎ戻してしまう。

やがて、商人等の方は、河岸に戻っていつて、黄金の量が充分であるか否かを確める。充分である場合には、それを取って塩を残しておく。もし不充分であれば、黄金も塩も残しておく。その後で彼岸の人々がまたやって来て、塩だけのものは持ち去り、そうでないものには、或は更に黄金の量を足し加え、或は塩だけを残してゆく。

そういう風にして、彼等の取引は、互に口を利くこともなく、互に顔を見ることもなく、暗黙の約束のうちに行われる。そしてそれが如何にも忠実円滑に行われて、嘗て一人の不徳義な者も出ない。黄金の量が充分でなければ決してそれに手を触れず、また、黄金が取去られた後でなければ決して塩に手をつけない。もしこれが対談を以て為されるならば、時には口論をひき起し、争鬪を招く恐れがないでもない。

ところで、こういう風に述べると、如何にも現代のことのようであるが、右の話は実は、十五世紀の中葉、ヴェニスの航海者サ・ダ・モストが、旅行記のなかに書いてるものである。降つては、西暦一六二〇年にジヨブソンが、一六七一年にムーエツトが、一八五二年と一八七二年とにベランジェー・フェローが、同じような話をアフリカ西岸で聞き取つてゐる。遙に溯つては、紀元前五世紀のギリシャの史家ヘロドトスが、既に書物の中に記述している。

ヘロドトスに従えば、この暗黙の取引法を、カルタゴ人等はアフリカ西岸で用いていた。船を海岸につけると、商品を磯に並べ、それからまた船に戻つて、狼烟をあげる。土人等はその相図を見て、海岸に走り出で、商品の側に適宜な黄金の量を置いて、奥に引込む。カルタゴの商人等は出かけてゆき、黄金の量が商品の価値に相応するものは、それを取つ

て商品を残しておく。もし黄金の量が不足のものがあれば、それを共に残し、船に戻って、新たな提供を待つ。こんどはまた土人等が出てきて、欲する品に黄金の量を添加する。かくて相方満足するまでは、決して不義な行為はされない。

事の真偽は保証の限りでないし、また立証の仕方もないわけであるが、然し、かかる暗黙の取引法が、果して実際に行われたとすれば、多少の手間はとれたろうとしても、如何にも円満に而も忠実に行われたらうということは、狡猾な現代人にも想像がつかないでもない。

*

右のような話を述べてゆけば、際限がないし、記録の調査も面倒になるから、転じて、世に知られていない秘事を一つ紹介しよう。

印度の奥、ネパール地方のヒマラヤ山間の僻地に、洞窟内に祭られてる秘仏がある。人里離れた場所ではあるが、屢々若い男女の参詣者があり、往々、年老いた善男善女の参詣者まであつて、鉄柵でふさがれてる洞窟の前に跪拜し、傍の小堂から守札を頂いてゆく。

それが、仏にしては珍らしい、恋愛の守護者であり、而も結縁のそれではなくて、情熱のそれである。そして更に不思議なのは、洞窟内の仏体が、黒檀の箱に納めた二個のミイ

ラである。

伝説は言う。――

古昔、この洞窟内に、一人の老僧が行い澄していた。数里距つた村里に、天女にまごう処女がいた。或る日或る時、老僧はその処女を見た。爾来、煩惱の迷い逐えども去らず、老僧の魂は禽獣となつて、遂にその娘を誘拐し、二人して洞窟内に蟄居した。

昼となく夜となく、老僧は娘をかき口説いた。娘は頑として応じない。然しさすがは、カーマ・スートラを所有する印度のことだ。手荒な蛮行や、猥らな仕業は、微塵もない。その代りに、不可思議の情熱の生活が初つた。

二人は洞窟から一步も外に出ない。勿論飲食さえもしない。娘は岩壁を背にして、身動きもせずに端坐している。老僧はその前に、足を組み腕を組んで、不動の祈願のうちに、じつと娘の姿を凝視している。煩惱即菩提の所業である。

昼間は薄明、夜間は暗黒、月の夜は蒼白い微光がさす。そして巨巖に圧せられた静寂が、洞窟内に常住淀んでいる。娘は一言も口を利かない。既に抵抗力を失つたのか、或は一身をあげて承諾したのか。老僧の視線の前に一切を曝している。老僧もはや、言語を絶した沈黙のうちにはいつている。娘を凝視するその眼から、一種の怪光が発散する。その怪

光が、彼と彼女との肉体を繋ぎ、彼の魂から彼女の魂へと、じかに霊気が流れる。彼女の魂はそれを受け容れる。有を無に還元した怪しい時間が、純粹持続を以て経過する。

かくて、幾日幾夜かを経た。老僧の両眼は次第に力を失って、その代りに、額の皺が次第に深まり、それが一の眼となつて、他物は一切見ず、ひたすら女の方を見つめている。女はその眼に見入られながら、次第に生気を失い、蠟のような蒼白な不動に陥っている。そして見つめ見入られながら、二人は呼吸も次第に細つてゆく……。

程へて、その洞窟内に、二つの死体が発見された。一つは、痩せ細つた老僧の死体で、額に大きな眼のある三つ目の、骨と皮ばかりのものだった。も一つは、美しい娘の死体で、豊かな肉体がそのまま蠟化した、みごとなミイラだった。

洞窟内のこの秘密は、二人以外の誰によつて知られたのか、或は想像されたのか、そのところは不明であるが、とにかく、二つの死体が発見されたのは事実で、それが鄭重に黒檀の箱に納められ、洞窟の中に安置され、更に鉄柵を以て俗縁を断たれて、秘仏として礼拝されているのである。

この秘仏は、永劫不可見のものとなっている。それを、ヒマラヤから西藏へかけて或る秘密探査に行った某君が、旅のつれづれのまま、ひそかに鉄柵を開き、黒檀の箱まで開い

て、中を覗いてしまったのである。

既に覗かれたものである。茲に発表しても、さして仏罰はあたるまい。なおその上、右の某君の冒流な言は、筆者の筆を走らす動機の一つともなった。某君は酒席などで、酔余の饒舌のうちに、若い美妓なんかに対して、往々変なことを口走る。

「君なんかは、若くて美しいから、用心し給い。あんまり色恋に夢中になって、見つめたり、見入られたりすると、危険だよ。一心に見つめると、三つ目になるし、一心に見入られてると、ミイラになるからね。」

そして、某君は呵々大笑するのだが、可笑しいのは夫子一人だけで、誰にも何のことやら分らない、筆者だけには分るが……。

然し、某君のそういう駄洒落こそ、秘仏の話を流すものであり、更に、沈黙の美を流すものであろう。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社

1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「沈黙」の話

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>